

投資変動、GDPギャップ、及び資本蓄積の効率性*

(現在、「過剰ストック調整のマクロ経済分析」に題名を変更)

田中淳平**

北九州市立大学

概要

本稿では過剰な資本ストックを抱え込んでしまった経済が、その過剰ストックを解消していくストック調整期においてどのようなコストを支払わなくてはならないかを議論する。一般に、新古典派成長理論では経済の貯蓄率を引き下げることで過剰資本を解消することができると同時に、そのストック調整過程において各期の消費水準が上昇し経済厚生が高まることが知られている。しかし、そのような結論は生産要素が常に完全稼働されているという前提に基づいたものであり、その仮定をはずすとストック調整期に大きなコストが生じる可能性がある。本稿では新古典派生産関数を導入したハロッド＝ドーマー・モデルを用いることで、ストック調整には貯蓄率だけでなく投資水準も低下する必要があること、投資水準の低下は稼働率を低下させるためストック調整期には稼働率低迷というコストが生じることを明らかにする。さらに我々は、以上の結論を前提とすると伝統的な45度線分析にはどのような問題点があるかを検討し、不況における投資需要刺激という45度線モデルにおいて支持されるマクロ安定化政策は過剰ストックを抱え込んだ経済においては必ずしも正当化できないものであることを指摘する。

JEL Classification : E12、E13、E22、E32、E61

Key Words : ハロッド＝ドーマー・モデル、不況、資本の過剰蓄積、ストック調整

* 本稿は応用経済学会（平成18年6月10日）で報告された初稿の改訂版である。討論者の松尾匡先生（久留米大学）の有益なコメントに感謝する。

** E-mail : j-tanaka@kitakyu-u.ac.jp